

## 教材としての英文学

— William Wordsworth “She Dwelt among the Untrodden Ways” の場合 —

藤田佳也\*

How to Use English Literature in Class

— William Wordsworth’s “She Dwelt among the Untrodden Ways” —

Yoshiya FUJITA\*

(Accepted 12 January 2010)

### はじめに

1990年代以降、日本の英語教育がジツヨウテキナ英語に大きく比重を移すなか、英文学を専門としていない学生たちに英文学、それも英詩を読ませることに（ひょっとして万が一）意義があるとしたら、それは一体何だろうか。ロバート・イーグルストーンは『英文学とは何か』（研究社、2003）の結びにおいて、次のように述べている。

……文学の持つ力は明白である。文学はつねにわれわれを根底から揺るがし、芸術についてばかりではなく、われわれ自身、他者、社会、そして広い世界についても、われわれ自身のもっとも大切にしている信念をさえ問い直させる。そしてこの問い直しこそが、他の何にも増して、英文学をやることの大切さではないだろうか。（川口喬一訳）

「問い直し」の一つの契機としての文学。日本文化とは大きく異なった価値観にもとづく外国文学であれば、更に有効だろう。そして学生たちにわずかなりとも予備知識のある英語で書かれ、テキストとしては比較的コンパクトである英詩は、まさにここの教材といえる。

「問い直し」には、何よりもまず「考える」という作業が不可欠である。できれば、学生たち自身がテキストに対して何らかの疑問を抱き、自らそれについて考え、そしてある種の答えを手に入れる、というのが理想だが、おそらく最初の段階ではいかなる疑問を抱くべきなのかもわからないだろう。疑問というのは、考える結果生じてくるものであるもので、

当然といえば当然のことである。そこで我々、英文学の教師に求められるのは、テキストの読解の過程で、適切な質問を学生たちに提示することである。では、ワーズワースの “She Dwelt among the Untrodden Ways” の場合、具体的にどのような質問が考えられるだろうか。

### 1 どんな形をしているか

“She Dwelt among the Untrodden Ways”

She dwelt among the untrodden ways  
Beside the springs of Dove,  
A maid whom there were none to praise  
And very few to love:

A violet by a mossy stone  
Half hidden from the eye!  
Fair as a star, when only one  
Is shining in the sky.

She lived unknown, and few could know  
When Lucy ceased to be;  
But she is in her grave, and oh,  
The difference to me.

まずは、ささいな発見が知的好奇心へとつながることを期待しながら、非常に単純な質問から。英語の不得意な学生でも、詩を一度も読んだことのない学生でも、この詩の右端がデコボコしていることには気づくはず。ここで “foot” という概念について説明する。“foot” 「詩脚」とは強く発音される音節と弱く発音される音節から成るユニットのことで、詩の

\* 酪農学園大学酪農学部酪農学科英語圏文化研究室

English-Speaking Culture, Department of Dairy Science, Rakuno Gakuen University, Ebetsu Hokkaido, 069-8501, Japan

リズムの基本となる。この詩においては、弱強のユニットが基本となっており、それぞれ奇数行では4つ、偶数行では3つずつこのユニットが含まれていることが、右側のデコボコの原因であることを確認したうえで更に質問。

## 2 この詩において、このリズムが乱れている唯一の箇所はどこか

ここでは、7行目の冒頭だけが強弱というリズムになっている、という解答だけを示したうえで、その理由については詩の内容を把握してから、ということにしておく。

ここで、この弱強というリズムが英語の自然なリズムであることにふれる。前置詞、冠詞、人称代名詞、あるいはto不定詞などの実例をあげつつ、英語がその性質上、弱強のリズムとなる場合が多いことを説明する。ハムレットの有名なセリフ“To be or not to be, that is the question.”などは実例としてわかりやすい。ここで実際に学生たちに詩を声に出して読ませ、詩の音楽性を感覚的に感じとらせるのも有効である。英語という言語のリズムを英詩が非常に巧みに利用しているということが少しでも伝われば上出来。このように英語のリズムを実感することは、英語を実際に話す際にも、また聞きとる際にも大いに役に立つはずである。よく言われることだが、英語に限らず、外国語特有のリズムを実感するうえで、詩というものは非常に優れた教材である。

更にここで、定型詩を構成するもう一つのルールである「韻」についてもふれる。元々、ルネサンス期にイタリアで確立された韻というものは、イタリア語のように類似した語尾をもつ語が多い言語では比較的踏むのが容易であるが、英語のように語尾のヴァリエーションの多い言語では、難しいということを説明。島国であるイギリスは、しばしば他国の侵略を受け、為政者が変わるたびに新しい言語が流入してきたことが、英語の語尾が一定でない理由の一つであることを示し、英語という言語、そしてイギリスという国の歴史的背景にも関心を向けさせたい。ともすれば抽象的なものにとどまってしまう「歴史」というものを、学生たちが具体的に理解するきっかけになってくれればと、淡い期待を抱きつつ。

## 3 「人の歩いていない道」とは何か

上記のように準備段階として大まかに詩の形式を押さえた上で、いよいよ内容に入っていくことになる。単に訳を書きとらせたりするのではなく、これまでに学習した文法的な知識を復習・定着させつつ、

「読む」という行為をできるだけ意識的に行う、というのが一つの目標である。たとえば、“She dwelt among the untrodden ways.”という冒頭の一行。“untrodden”に関しては、過去分詞が形容詞として使われる用法について再確認したり、あるいは“among”に関しては、“among”という前置詞が使われているということは、彼女の住んでいる所へは少なくとも3つ以上の道が通っているはず、といった文法的な説明も加える。

そこで再び質問。「人の歩いていない道」とは何か。道は人が歩くからつくられる、あるいは人が歩くから道になる、というのが通常。では、これらの道を人が歩いていないことについてはどう説明できるのか。ここで学生たちに理解させたいのは、「コンテキスト」という概念である。それにとまって「テキスト」という概念についても説明する必要があるだろう。

まずはおおざっぱに、テキストは「つくられたもの」、コンテキストは「テキストを取り囲んでいるもの」ぐらいの説明で良いかもしれない。ここで一番のねらいは、テキストの意味はコンテキストが決める、ということを理解させることである。たとえば、ドアノブの意義は、ドアノブをドアから外し机の上でながめても把握することはできない。ドア、部屋、あるいは建物全体、更にはその建物の存在する環境といったものと関連づけて考えたときにはじめて「正確に」理解することができる、といったことを導入として話す。

更に、小森陽一が『小森陽一、ニホンゴに出会う』（大修館、2000）でとりあげた、夏目漱石の『坊ちゃん』のエピソードを例として示す。教師として松山に赴任そうそう宿直当番が回ってきた坊ちゃんは、何もするところが無いので宿直室を抜けて道後温泉へ入りに行ってしまう。そこで校長先生や山嵐とバッタリ会い、今日は宿直当番ではなかったかと問い詰められる。2人の詰問など全く意に介さず学校に戻ってくると、今度は寄宿生たちのいたずらが坊ちゃんを待っていた。都会からやってきた新人教師をからかうべく、寄宿生たちが宿直室の蚊帳の中に何十匹というバッタ（問い詰められた学生たちは「そりゃ、イナゴぞな、もし」と言い返すが）を投げ込んでいたのだ。

このエピソードの意義について考える際には、宿直という制度、および当時の日本の国家体制について理解しておかなければならない。当時、宿直室は天皇の「御真影」と「教育勅語」の謄本を奉安しておく場所であった。それゆえ、当時、宿直室は通常

2階に置かれた。天皇を踏むことは不敬にあたるからである。そして宿直の教師の任務は、御真影と教育勅語の謄本を命をかけて守ることであった。実際、学校が火事になった際に「御真影」と「教育勅語」を持ち出そうとして殉職した教師もいたという記録が残っている。天皇を頂点とするピラミッド型の近代国家を目指していた当時の日本において、教師が担っていた大きな責任を象徴的に示す出来事である。そしてその教師が教育の対象としていたのが学生たちであった。

そうすると、宿直室を抜け出し温泉に行った坊ちゃん、そして宿直室にバツたあるいはイナゴを投げ込んだ寄宿生たちの行動というのは、単なる職務怠慢・無責任やいたずらというものではなくなる。それは、極めて反体制的で、ラディカルな行為であるといえる。このようにこのエピソードの意義がわかれば、坊ちゃんという青年のとらえ方、あるいは『坊ちゃん』という小説、夏目漱石という作家の評価のあり方も、大きく変わってくるにちがいない。テキストを適切なコンテキストと関連づけ理解することの意義をこういった具体例を通して知ることが、どのような分野を専門とする学生であっても重要なことであろう。

#### 4 このテキストを読むうえでのコンテキストとは何か

では、この詩を読むうえでのコンテキストとは何か。この詩全体、ワーズワースの他の作品、ワーズワースという詩人の伝記的背景、ワーズワースが属していた当時のイギリス、あるいはヨーロッパ・世界の社会的・政治的・歴史的・文化的・経済的状况、といったものがコンテキストとしてあげられるだろう。そして“the untrodden ways”というフレーズについては、当時のイギリス社会の変化というコンテキストにおいてみることで手がかりがえられる。ヨーロッパで最初に産業革命を達成したイギリスでは、工業化に伴い人口の移動が起こり、都市化及び過疎化が国全体で急速に進行する。最初に発展するがゆえに、環境破壊といった現代的な問題が最初に起こってくるのもまたイギリスという国である。つまり「人が歩いていない道」とは、「かつては人がいたが、産業革命による社会構造の変化によって今はいなくなってしまった地域」を表している、と考えることができるだろう。

ここで「パラドックス」という概念を理解させるべく、「ロマン派のパラドックス」というものにふれてみてもよいかもしれない。ワーズワースの時代は、

産業革命によって初めて人間がいわば「自然の形を変える力」を得た時代だといえる。ワーズワースは自然を詩の一つの題材として選びとるが、彼以前には自然を自然として扱う詩はほとんどなかった。人間が自然を壊す力を手に入れ、そして実際に壊しはじめた時に初めて、人間は自然を歌うことができた、ともいえる。自然というものが現代のように「癒し」の空間としてではなく、畏怖の対象であった時代について、学生たちと共に想像をめぐらせてみたいところである。

また、この第1連については、ヨーロッパ文化圏では鳩といえば白い鳩がイメージされること、そこから一般化して、動物を含め物のとらえ方は文化圏によって大きく違うことにふれる。そのうえで、清らかな泉と白い鳩が穢れない処女と重ね合わされているということ、つまり、“maid”（＝「処女」）としての彼女のイメージを、“springs,” “Dove”といった、彼女が住んでいる場所の叙述に使われている語が、具体化あるいは補強していることを説明する。学生たちは、小説を読むにしろ、映画やドラマを観るにしろ、おそらく物語の「筋」というものに多大な関心を寄せていると思われる。あるいは、ほとんどそれだけを追っているといってもよいかもしれない。そういった学生たちに、情景描写のような、筋と一見関係ないように思えるものも、実は重要な役割を果たしていることを理解させたい。

また更に話題を広げて、場所の説明のような、一見客観的な情報のように見えるものも、通常はある方向からある目的で選びとられた情報であり、そこには伝えるものの意図、あるいは意識されていない欲望のようなものが反映されている可能性がある、ということについても話す。学生たちの周りには様々な表現から具体例を見つけさせてみる、というのも面白いだろう。

#### 5 「苔むした岩陰に咲く一輪のスマイル」という比喩は、何を表しているか

第2連では、「スマイル」と「星」という、彼女を説明する2つの比喩が用いられるが、ここでは、この2つの比喩を学生たちに解釈させてみる。スマイルの比喩に関しては、なぜ岩陰なのか。なぜその岩は苔むしてるのか。そして、まず第一になぜスマイルという花が選ばれたのか。という3つの質問を用意する。まずは「岩陰」から。ここでは、「比較・対比」という作業をさせてみるとよいだろう。たとえば「野原に咲くスマイル」という表現と比較すると、「岩陰に咲くスマイル」はどう違っているかを考えさせる。岩陰

に咲くスマレが、野原に咲くスマレと比べて、人目につきにくいことは、すぐに気づくはず。そして、それが第1連で述べられていた「ほめてくれる人は誰もいないし、愛してくれる人もほとんど誰もいなかった」という説明と、そして次の行の「半ば人の目から隠れて」という表現とも重なってくることもわかる。

更に、苔がつくのは一般的に日陰でジメジメしたところであり、これも「人目につかない」ということと結びついていることに気づくだろう。また、ジメジメしたというのは、第1連の「泉のそば」という、彼女が住んでいる場所の説明とも合致する。表現の一つ一つが文脈と合致しているということを学生に確認させたいところである。さて残るは「なぜスマレか？」だが、これについてはここでは少しじらして保留しておく。

#### 6 “fair” の意味は何か

ここでは、コンテキストとの関係から“fair”の意味をしばっていく、という作業を学生たちに行わせる。まずスマレの比喩が直前にあることから、「美しい」という意味はありそうだ。ここで考えなくてはならないのが、「たった1つの星が輝いている時の星」という表現の意味についてである。星がたった1つ輝いているというのは一体どういう状況か。他の星は雲にでも隠れているのか。星に詳しい学生なら、きっとすぐにピンと来るはず。夕方、一番最初に輝き出し、明け方、一番最後まで輝いているように見える星。つまり、金星ではないか。「宵の明星、明けの明星」というフレーズを思い出す学生もきっといるだろう。

金星は英語で“Venus”。つまり、ここで彼女は「美と愛と芸術を司る女神」に喩えられていることになる。やはり“fair”に「美しい」という意味はありそうだ。そして、語り手にとって彼女が自分の人生を支配する力をもった重要な女性であった、ということもわかってくる。また、この星が地球から見た時にかなりの光量をもっていることを思い出すなら、“fair”には「くっきりとした、際立っている」という意味も読みとれる。そして更に、第1連“maid,” “springs,” “dove”と関連づけると、「汚れのない」という意味も読み込めそうだ。ここでは、“fair”という1つの語の意味が、複数のコンテキストによって重層化しているということ、更に一般化して、同一の表現でも文脈によって異なった意味を生じうるということについて説明する。特に最近の学生は、全体の文脈をとらえるということが非常に不得意なの

で、これはしっかりと理解させたい点である。文脈の重要性を実感できれば、リーディングの授業などでのテキストへの取り組み方も違ってくる(はず)。

#### 7 なぜスマレか、再び

さて、ここで保留にしていたスマレの比喩について考えることになる。まずはスマレの印象などを学生たちに聞いてみる。ここでも、たとえばバラなどと比較させてみるとよいだろう。クレアンス・ブルックスとロバート・ペン・ウォーレンの *Understanding Poetry* (Henry Holt, 1938) でも、“A full-blown rose of glorious hue, / Bright’ning a garden wall.” というフレーズとの比較がされている。次に、花にはそれぞれ意味が与えられていることがあると説明し、辞書で“violet”を引かせてみる。例えば、『ジーニアス英和辞典』を引くと、「控えめな人」という、まさに第1連における描写とピッタリ合致する意味も目に入ってくることだろう。更に「謙譲、貞節、薄命」といったもののシンボルとして使われることがあるとの説明もある。「薄命」については、この時点では明らかにされておらず、第3連にて示されることになるが、これら3つの意味はどれも「彼女」に当てはまり、だからこそスマレが比喩として選ばれていることがわかる。

ここでスマレと星の比喩の関係について、疑問を抱く学生もいるかもしれない。つまり、“Fair as a star, when only one / Is shining in the sky.”における星のイメージは、先のスマレのイメージと矛盾しているのではないだろうか、という疑問だ。というのも、ルーシーは、岩陰のスマレのように「目立たない」存在でありながら、空に輝くたった一つの星のように「目立つ」存在である、といっていることになるからである。ここで再び学生たちに考えさせる。まず、この2つの表現が矛盾しているのかどうか。そして矛盾していないとすると、どう説明することができるのか。

もちろん、このスマレと星には、美しいという点、孤独であるという点以外にも、目立たなさ(夕方は忙しい時間帯なので、たった一つの星には、岩陰のスマレ同様、ほとんどの人が注意をはらわない)、はかなさ(スマレもいつかは枯れてしまうし、星も朝になれば消えてしまう)など、共通点もあり矛盾していないと考えることも可能だ。特に「強さ」については、高校の国語の教科書などにも載っていることの多い、太宰治の『富嶽百景』の一節を例としてあげてみるとわかりやすい。

## 8 ワーズワース、太宰治、そして葛飾北斎

「おや、月見草。」

そう言って、細い指でもって、路傍の一箇所をゆびさした。さっと、バスは過ぎてゆき、私の目には、いま、ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花卉もあざやかに消えずに残った。三七七八米の富士の山と、立派に相對峙し、みじんもゆるがず、なんと言うのか、金剛力草とでも言いたいくらい、けなげにすくと立っていたあの月見草は、よかった。富士には、月見草がよく似合う。

巨大な富士と対置されることで、月見草が「金剛力草」へと変貌を遂げる、対比の妙が極めて鮮やかな印象を読者に与える場面である。

偶然にも富士つながりとなるが、ここで葛飾北斎の『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』を学生たちに見せる。遠近法によって誇張された波と、遠景に小さく描かれた富士。更によく見ると、波間には三艘の船と襲いかかる波を避けるべく伏せる人々。波は構図上、まさに人と富士に襲いかかろうとしているが、ゴッホはこの波を「鷲の爪」と評した。非常に的確な説明である。そして、その爪の下で慌てふためく人々とは対照的に、当たり前ではあるが、悠然と微動だにしない富士は、小さく描かれているがゆえに尚一層、その強さを見るものを感じさせる。小さなものと大きなものが対置された時に、小さいがゆえにその小さなものの強さが際立つ。まさに表現のパラドックス。この詩の岩陰に咲く一輪のスマイレにも、同様の強さを読みとる学生がいるかもしれない。そのように読むとするなら、「朝が来れば消えてしまうが、夜が来ると甦る金星」が暗示する、ある種の「強さ」とも重なってくることになるだろう。

とはいっても、やはり「目立つ」「目立たない」という点において2つの比喩は矛盾している、と考える学生も多いだろう。では、どう考えるべきなのか。

第2連は、第3連で述べられることを比喩を用いて先取りして表現している。彼女は、人知れず生き、人知れず死んでいった。しかし、彼女がもうこの世にいないということは、「私」にとっては非常に大きな違いなのだ。世間一般の人々にとってみれば、岩陰に咲く一輪のスマイレのように人目を引かぬ娘であったかもしれないが、私にとってみれば、彼女は空に燦然と輝く唯一の星のようにかけがえのない存在であった。つまり、スマイレと星の比喩は、一般の評価と語り手個人の見解を対比的に表している、と

いうわけである。

最初に提示しておいたリズムの乱れに、ここで一つの答えを与えることができる。前に述べたように7行目“Fair as a star, when only one / Is shining in the sky.”の冒頭においては、弱強のリズムが乱れ強弱となっている。その結果“Fair”と前の行の最後“eye”との間に一拍休止がおかれ、“Fair”以下が強調されることになる。世間一般の人々とは異なる、語り手独自の考えを表現する重要な比喩が提示されている箇所が、形式の上でも他の部分と区別されている。形式と内容が不可分な形で結びつき、有機的統一体をなしているということを学生たちに実感させることができる箇所であろう。

## 9 『ダヴィンチ・コード』とワーズワース

また、この星の比喩は、生前、星のようであった彼女は今や死んで、まさにその星になってしまっている、というアイロニーを形成しており、ワーズワースの汎神論的傾向がうかがえる一節でもある。ダン・ブラウンの『ダヴィンチ・コード』においては、金星がキリスト教以前の原始宗教、あるいはギリシャ・ローマ文明における反キリスト教的思想を象徴的に表す記号として重要な役割を果たしているが、自然の摂理の神聖さに基づく原始宗教は、「金星」というキーワードでワーズワースの汎神論と重なっている。読書離れの進む学生たちに、こういった形でできるだけ話題となっている本や映画を紹介していくことも重要であろう。

更に、「比喩として発した言葉が現実のものになってしまう」というこのアイロニーが、彼女を扱った別の詩においても見られることを指摘してもよいだろう。これは、ワーズワースのテキストの一つの特徴である。

“A Slumber Did My Spirit Seal”

A slumber did my spirit seal;  
I had no human fears.  
She seemed a thing that could not feel  
The touch of earthly years.

No motion has she now, no force;  
She neither hears nor sees;  
Rolled round in earth's diurnal course,  
With rocks, and stones, and trees.

時間の影響を受けない永遠の存在のように思えるが

ゆえに「もの」という比喩があたえられていた彼女が、死によってもはや自ら動くことのない「もの」と実際に化してしまう。自ら動くことはなくとも、地球の自転とともに回り続けるがゆえに尚更、彼女の変貌は強い印象を読者に残す。

## 10 ワーズワースのオフィーリア

『ハムレット』において、オフィーリアの死は神の禁ずる自殺である可能性があるため正式の葬儀を執り行うことができない、とする聖職者に向かって、兄のレアティーズが言う言葉“Lay her i' th' earth, / And from her fair and unpolluted flesh / May violets spring!” (Hamlet, V. i. 261-3) の反響もこの詩に聞きとることができる。産業革命という大きな時代の流れに同調することなく田舎に残り、人知れず死んでいくルーシー。周りの者すべてが本心を偽り演技をしているなか、ただ一人自らの感情に素直に従うがゆえに正気を失い、一人死んでいくオフィーリア。若い二人の死におけるこの重なり合いを指摘したうえで、「インターテクスチュアリティ」という概念について、説明してみるのもよいだろう。

何はともあれ、岩陰のスマイレと大空の1つの星という比喩から、比喩というものが単に装飾の役割を果たすものではなく、詩の核・中心であることを学生たちに伝えたい。学生たちに身の周りにある様々な表現から比喩を探させ、それについて解説させてみるなどの課題を課してみると面白いだろう。学生たちが自ら表現について考えるきっかけになるだけでなく、我々教える側にとってもきっと新たな発見ができる。

## 11 どうして固有名詞「ルーシー」は、10行目で初めて使われるのか

これが最後の質問となる。固有名詞が先に出てきて、それを代名詞で受けるのが通常書き方のはず。ではこの詩ではどうして10行目で初めて「ルーシー」という固有名詞が示されるのか。この行が、ルーシーが死んだことを告げる行であることと何か関係がありそうである。

ここで、特に西洋においては「名前」=「生命」という図式が見られることについて説明する。映画の題名にもなった“godfather”とは名づけ親のことだが、名前を与えてくれる人物のことを神と呼ぶのは、名前が生命に他ならないからである。また、ワーズワースと同じくロマン派の詩人に P. B. シェリーがいるが、その妻メアリーが書いた『フランケンシュ

タイン』において、怪物には名前がつけられていない（誤解されがちだが、フランケンシュタインは怪物を創り出した科学者の名前）。これこそ、怪物に真の意味での生命が与えられていないことの印であり、それゆえ怪物は自らの存在意義について苦悩するのであるといえる。

このように、「名前」=「生命」という図式を確認したうえで、ワーズワースのテキストに戻ると、このルーシーという少女は、詩の中で初めて〈名付けられた=生命を与えられた〉直後に、その死が告げられていることがわかる。読者は、ある少女の生命の儚さを実際に「経験」するのである。

ここで、黒澤明の『生きる』の一節を観せると非常に効果的である。志村喬演ずる主人公は、無気力な生き方をしている公務員。冒頭のナレーションで「生きているが死んでいる」と評される。そんなある日、彼はガンで余命半年と宣告される。当初、死の恐怖から「酒」「女」「博打」と自暴自棄な振る舞いにのめり込んだ彼は、ある時、残り少ない自分の人生を貧しい人たちのために生かそうと決心する。カフェにおけるこの場面では、見知らぬ若者たちが誕生会を開いており、彼らの歌う「ハッピー・バースデー」をBGMに、主人公はカフェを飛び出して行く。次の日、主人公はいぶかしがる同僚たちをよそに、貧民たちの住む一角に公園を作るという仕事にとりかかり始める。ここでもBGMとして「ハッピー・バースデー」が使われている。まさしく彼は本当の意味で生きはじめたのだ。しかし、その生の流れを断ち切るかのように、次のカットは彼の通夜の場面となる。そしてその後は、その通夜に出席した様々な人々の言葉から、彼が本当の意味で生きていた時間が浮き彫りにされていく。この映画において、彼は生きはじめた途端に死ぬ。まさしく、観客は彼の生命の儚さを実際に身をもって「経験」することになる。「説明」するのではなく、実際に読者／観客に「経験」させること。これは優れた芸術家の表現のあり方の特徴であり、学生たちにそのことを実感させるには、ワーズワースにしる、黒澤明にしる、非常に効果的な例である。

## むすび

以上、ワーズワースの“*She Dwelt among the Untrodden Ways*”を題材に、いかに文学の授業を進めていくか、そのモデルの1つを示してきた。授業の過程で我々、英文学の教師に求められるのは、扱うテキストをいかに「今、ここ」にある「現実、世界」と結びつけられるか、ということである。こ

の「結びつけ」が成功したとき、学生たちが文学をリアルなものとして「経験」することが可能となる。そしてそれはきっと、世界の「問い直し」へとつな

がっていく。その時、文学と教育は何らかの重要な接点を見出すことができるはずである。